

# IB MYP/PYP の導入に向けて

## OIS によるカリキュラム改善のための取り組み

原 和久

OIS 日本語科

### 1. はじめに

インターナショナルスクールでの教育実践やカリキュラムについての研究はこれまで、あまり行われてこなかった。インターナショナルスクールが文部省の直接の指導を受けず、独自のカリキュラムを展開しているからというもたぶん一つの理由であろう。しかし、近年「総合的な教育」や「国際理解教育」に対する関心の高まりとともに、「インターナショナルスクールで行われる教育」にも人々の関心が注がれ始めているように思われる。筆者は、千里国際学園・大阪インターナショナルスクールに日本語教師として 1996 年より勤務しその教育に触れる機会をもってきた。特に 2000 2001 年度においては、本校のカリキュラム改善及び IB プログラム (MYP/PYP) 導入のための委員会にもメンバーとして出席し活動を行った。一年という短い期間の活動ではあったが委員会リーダーのジョン・サール氏をはじめとするメンバー達の知見に学ぶところが非常に多かったというのが私の率直な感想である。本論文は委員会や職員会議等で OIS の教員達によって議論されてきたことを筆者自身の観点から再構成しまとめたものである。インターナショナルスクールにおいて今何が問題とされ、どのような考えに基づき、どのようなサイクルでカリキュラムが改善されようとしているのか、長期的な改革の過程のほんの一部ではあるが、ここに記録しておきたい。

### 2. WASC による認定と IB 教育

千里国際学園大阪インターナショナルスクール(OIS)は、関西圏の外国人子弟に対する教育を目的として 1991 年に創立された学校である。現在、ECP から 12 年生までの約 240 人が OIS で学んでおり、特に 11-12 年生に対しては、創立当初より国際的教育プログラムとして定評のあるインターナショナル・バカロレア教育機関(IB)のディプロマコースをカリキュラムとして採用してきた。ディプロマコースは、大学教育への準備教育であり、主に親の職業の都合などで国際間移動を伴う高校生に対して卒業前の最後の 2 年間に実施され、2 年間のコースの履修と筆記試験などの要件を満たせば、各国の大学への入学もしくは入学資格が認められる制度である。本校でもすでに多くの生徒たちが IB のディプロマコースで優秀な成績を収め、卒業後世界各国の大学に進学している。

ところで、千里国際学園は二つの学校で構成されているが、主に帰国子女を受け入れる千里国際学園中等部・高等部 (SIS) は、いわゆる「一条校」であり文部省のカリキュラムに沿って運営されている学校である。また、SIS は日本の高校の卒業資格および日本の大学への入学資格も文部省より認定されている。それに対して OIS は、インターナショナルスクールであり学校教育法第一条が定めるところの正規の「学校」としては認められておらず、日本の法律上も「各種学校」のカテゴリーに区分される。そのため、日本の高校の卒業資格がとれないかわりに文部省のカリキュラムにも従う必要がなく、独自のカリキュラムにしたがって、相当に自由かつ弾力性のある教育が施されている。また、OIS はアメリカの教育省によって公認された機関である WASC (Western Association of Schools and Colleges) によって正式に認められているため、日本国以外の大学への進学に対して問題が生じることはほとんどない。したがって本校の場合、IB ディプロマコースによって授けられるディプロマ(学位)は、WASC 認定校である本校を卒業する生徒にとっては、その付加価値を高めるものといえることができる。

WASC から学校として正式に認められるためには、教育施設・教育内容・教育方法など学校教育に関するすべての事柄について綿密かつ包括的な自己調査 (Self Study) を行い、その結果を WASC 本部に送付し認定を受けなければならない。また、WASC による基準を満たし認定 (accreditation) を受けたあとも、引き続き 4 年に一度の調査団の訪問による調査を受け、委員会より出された提言や勧告について学校自身で検討し、次の WASC の訪問までに改善しなければならない。このような継続的改善のプロセスとサイクルを通して学校教育の質は保たれる。OIS は、1991 年に創立して以来、過去 2 回の WASC の訪問を受けている。第 3 回目の訪問となる 2000 年に向けての準備は次のように進められた。

1993-94年	教員による自己調査 (Self Study)
1996年	第一回 教員・生徒・保護者による包括的な事前調査完了
1997年	1月 WASC への中間報告の提出 3月 WASC による中間報告書の評価
1999年	9月より WASC 委員会のリーダーに Mr. ジョン・サールが就任
2000年	1月 第2回 教員・生徒・保護者による包括的な事前調査完了
2000年	4月 WASC 調査団の訪問 5月 WASC による評価報告書 さらなる改善にむけて検討のスタート

### 3. WASC から与えられた課題

2000年度に出された WASC の調査報告書(1)によると、WASC による改善のための提言は、「生徒の学習 (Organization for Student Learning)」、「カリキュラムと教授 (Curriculum and Instruction)」、「生徒へのサポート (Support for student Personal and Academic Growth)」、「資源のマネジメント (Resource Management)」等、実に広範囲にわたる。そのそれぞれについては、いくつかの改善点がしめされ、次の訪問までに具体的にどのような改善をなしたのか学校には報告する義務がある。それぞれの項目についてどのような提言が WASC から出され、どのような取り組みをしたかについては紙幅の関係上割愛せざるを得ないが、この中で私達が最も重要であると考えたものは、カリキュラムに関しての次のような提言であった。

“The visiting committee recommends that faculty and administration collaborate on the development of and ECP through 12 articulated written curriculum guided by the SLR's.” \*  
(WASC Visiting Committee report April 18-21, 2000, p.17)

\*SLR's = Student Learning Results(生徒に期待される学習の成果) (2)

教員と管理職が協力し、生徒に期待される学習の成果が達成されるように、ECP から 12 学年までの明確に文書化されたカリキュラムを開発すること

この提言は、その中に2つの重要な指摘を含んでいる。ひとつは「ECP から 12 学年までの明確に文書化された」という部分と「カリキュラムは、教員と管理職が協力して開発するもの」という指摘である。これまで、教科ごとにカリキュラムはあったのだが、確かに ECP から全 12 学年に渡ってそれが明確に文書化されていたとは言い難い。また、本校においてはカリキュラムは教員が作成するものであり、教員間あるいは管理職との協力関係はあまりなかった。したがって、自分の教えることについては十分に把握していても、自分の教室以外でどんな「学び」が展開されているのか知らないことのほうが多く、学校としての長期的なビジョンに基づいて統一的なカリキュラムを開発していくということも、従来は難しかった。例えば「社会」の教師は「数学」で何が教えられているかまったく知らなかったり、インターナショナルスクールの常として先生が何年かごとに変わるとカリキュラムが極端に変わったりといったことは、よくあることであった。また、小学部と中等部・高等部の間に内容の重複やギャップがあることも私たち自身 Self study で認識していたことである。この点について WASC が改善を求めたのは至極当然のことであろう。(3)

もうひとつ、注目しなければならないのは「生徒に期待される学習の成果」(Student Learning Results)が達成されるようにカリキュラムを組織しなければならないという指摘である。つまり、生徒が卒業時点でどんな人間になっているべきか、ということを考え、そのゴールに向けてすべてのカリキュラムを見直さなければならないということである。もし、生徒に期待される成果が達成されないのならば、どんなにすばらしい教育が個々の教室で行われようとも、学校はアカウンタビリティを失い、ひいてはその存在価値さえも疑われかねない。到達点として、知識の習得のみならず、態度や人格、人間性をも含めたゴールを設定しその成果を常に検証することで、教室内の学びが単なる知識の習得(もしくは知識の断片化)に陥るのを防ぐことができるものと思われる。

## 4. 改革へのステップ

### 4.1 MYP / PYP 導入の決定

2000年4月、福田学園長(当時)により OIS の教職員が召集され職員会議が行われた。短い会議であったが、内容は「本校創立 10 年目になる 2001 年度より、学園の新たな発展に向けて IB のミドル・イヤー・プログラム (MYP) およびプライマリー・イヤー・プログラム (PYP) を導入できないか、検討して欲しい」と言うものであった。当時、MYP/PYP について具体的な内容を知っている教員はまだ少なく、創立以来 10 年の実践で質の高い教育を行うインターナショナルスクールとして外部の評価も高まってきただけに、「なぜ、いま MYP/PYP を導入しなければならないのか」という気持ちの方が教員の間にもあったことは否めない。また、予算の問題や姉妹校である SIS のシェアードクラスをどう MYP の枠に取り込むかといった問題を指摘する声もあった。そのため、すぐに福田学園長の諮問機関として IB・MYP/PYP の検討委員会がつくられ教員にも資料が配られた。筆者もそれまで MYP/PYP という言葉を耳にしたこともなく、急いでその内容の把握にとりかかった。福田学園長自身、なぜ MYP/PYP なのかということは明確にはされなかったが、千里国際学園が MYP/PYP に関心を持つに至った理由には、次のようなものがあるのではないかと推測する。

- ・ MYP に対する世界的な関心の高まりに対する興味
- ・ 生徒間の移動をスムーズにする。MYP で学習する生徒の世界的な増加。海外での動きと一致させ、帰国生に対応できる。
- ・ 教師の退職などの際にも、カリキュラムが変わってしまうことを防ぐ。また、カリキュラムに統一性と継続性を与えることができる。また、長期的にリソースを配分することができる。フレキシビリティのある MYP のカリキュラムは、優秀な教員の新しい試みや才能を萎縮させることなく、カリキュラムに継続性と統一性を与えると思われる。
- ・ 少子化への対応　マーケティングのツールとして、MYP を導入することで、学校の教育に付加価値をつけることが出来る。
- ・ SIS/OIS を統合するフレームワークとして本校の理念（一つの学校）を達成することが将来的に可能性として考えられる。

## 4.2 SIP 委員会の設立

### 4.2.1 SIP - Start small, Think big! -

「WASC に与えられた課題」、すなわち K 12 の明確なカリキュラムの作成と「学園長の MYP/PYP 導入の構想」を同時に進めながら学校の改革を進めるために、2000 年 9 月に新メンバーによる School Improvement Process (SIP) 委員会の活動が開始された。日本語にすると「学校改善委員会」とでもなるだろう。これまでも WASC の提言に対して改善を促進するためにいくつかの委員会が常時存在したが、そもそも学校の改善は WASC の認可のためだけに行うものではなく、よりよい教育に向けて常に継続していくべきもののはずである。そのような考え方から、いままで WASC 委員会と読んでいたものを改め、教員からネーミングを募集し決定されたものである。SIP という英語のネーミングは、「少しずつ」(to sip) という言葉とかけてある。それには、'Change is a process not an event' (改革は一度に起こるものではなく常に継続していく過程である) という考え方、そして、'A little bit at a time' (出来ることから少しずつ改革していこう) という気持ちが含まれている。

### 4.2.2 SIP のメンバー構成

2000 2001 年度の SIP 委員会のメンバー (10 名) は、各学校 (小学部、中/高等部) 各教科グループから選ばれた教師、及び管理職のメンバーによって構成されている。各教科グループの代表は、そのグループの意見をミーティングに反映させると同時に、ミーティングで決まったことをグループの構成員に報告しなければならない。会議は、その場でノートブックコンピューターに記録され議事録は e mail ですべての教員に送られる。また、学内 LAN に SIP のホームページも開設され、会議で決まったことは、その日のうちにサイトに掲載された。司会やその他の役割分担 (会議の準備、書記など) は、毎月ローテーションすることになった。ミーティングは、一ヶ月に 2 回の割合で年間を通して行われた。(4)

## 5 . カリキュラムの見取り図

「ECP から 12 学年までの明確に文書化されたカリキュラム」はどのようにして開発されるべきであろうか? 日本の学校であれば、ある意味これは「文部省」の仕事であり個々の学校の仕事の範囲を大きく超えている。日本の学校ならば、指導要領を見ればすでにそこに文書化されたカリキュラムが

示されているのである。しかし、OIS が独立性を保ち、独自の教育理念に基づいた質の高い教育を継続していくためには、自己改革の視点からの継続的なカリキュラム改善は必修のものである。もちろん、OIS にもほとんどの学年と教科において、すでに文書化されたカリキュラムは存在している。しかし、第3節でも述べたように、教科間、学年間でよく検討され整合性をもつものにはなっていなかった。自分の受け持つ学年や教科以外でどんなことが教えられているか、他の教科のカリキュラムを読んでみるべきなのかもしれない。しかし、管理職はともかく、すべての教員がすべての学年および教科の年間のカリキュラムを読むのは現実的には無理がある。そこで、私達はカリキュラムを短時間に一通り見通すことができる見取り図のようなものを代わりに用意できないか、と考えた。各教員が自分が教えているコースの概要を1~2枚の用紙に簡単にまとめ、これを「カリキュラムマップ」と呼ぶことにした。(5)コースディスクリプションは、文章でコース内容が要約されたものであるが、「カリキュラムマップ」は、一年の流れに沿って、各コースのカリキュラムから「コンセプト」「コンテンツ」「スキル」「学習の成果 (SLR's)」「エリア・オブ・インタラクション」「アセスメント」(6)の6項目に絞って書き出したものであり、すべての教科のすべてのコースで統一したフォームが与えられている。ワード文書で書かれたカリキュラムマップは、構内LANでいつでも閲覧できるように、コンピューター・サーバーの中に教科/学年ごとのフォルダーをつくり、そこに入れるようにした。

「カリキュラムマップ」は「カリキュラム」の「見取り図(マップ)」であり、それに基づいて次に本校が進むべきカリキュラムのあり方を模索する手がかりにしていこうとする意図がこめられている。各コースで教えられていることを、簡潔にまとめたカリキュラムマップを全コースにわたって作成し、それに基づいて教員間のディスカッションを促進することで、各学年間の、あるいは各教科間の内容のオーバーラップやギャップについて、より深い認識を得ることができるのではないかと考えたのである。その学年で、その方法で、その教科で、ある特定の内容やスキルがなぜその時期に教えられなければならないのか、プロの教員として常に明確に意識していなければならない。また、それらの「コンテンツ」や「スキル」が、どのように生徒の学習の成果に結びつくのかも明らかにされなければならない。さらに、カリキュラム・マップは、将来、教科を超えて関係しあうテーマに気が付き、学際的なプロジェクトやエリア・オブ・インタラクションを促進する上でも、有効なものになっている。カリキュラムの改定には、かなりの時間と労力を要するが、マップの作成は、いま存在するカリキュラムをまとめる形の作業になるので、時間的にも教師の労力を軽減する。といっても、実際に全教科全コースに渡るマップを一度に作成するのは教師の負担も大きい。一年にわたって試行錯誤を繰り返しながら、順々に必要な項目を付け加えながら教師間のディスカッションが進められた。一年に何度かの教員研修日(In-service Day)を利用し、教師間の理解を深めながら、カリキュラムマップ作成の作業は次のような流れで進められた。管理職の方から一方的に指示が出されるのではなく、SIP委員会を通して教員の意見の交流を図り、常にボトム・アップのアプローチで、共通理解が深められていったことは、注目に値すると思われる。

### カリキュラム・マップ作成を通じた、カリキュラムの検討

「コンテンツ」「スキル」の執筆

第一回 教員研修会

カリキュラムマップとは何か、教師間の共通理解の確立を目的として、第一回教員研修会は開かれた。その後、実際にカリキュラム・マップ作成の作業に着手。まず第一段階として、生徒が各教科で習得すべき「コンテスト」と「スキル」を既存のカリキュラムから抜き出し、それを異なる教科間で比較検討した。また、フォローアップとして教科グループで集まり、「教科内で、オーバーラップや抜けている項目はないか?」「他の教科で教えられているコンテストやスキルとのオーバーラップはないか?」「適切な学年で、適切なコンテスト/スキルが教えられているか?」について話し合いを行った。ここで、私たちは「コンテンツ」を「生徒に知って欲しいこと(内容)」、「スキル」を「生徒に出来るようになって欲しいこと(技術)」とそれぞれ定義したが、実際に検討してみると自分達が教えていることが「コンテンツ」なのか「スキル」なのか、明確にすることはかなり難しい作業であった。このような作業を通して、どの教科のどの学年で、どんな学習が行われているのか、学校で行われている学びの全体像を教科や学年の枠を超えて理解することができたのは、とても有益であった。

「コンセプト」を追加して、もう一度書き直し

第二回 教員研修会

第二回教員研修会では、第一回研修会で検討した「コンテンツ」と「スキル」によって、教師がいったいどのような「コンセプト」(概念)を生徒に理解させようとしているのか、が問題にされた。この「コンセプト」については、多くの教員が必ずしも十分に意識的に教授活動をおこなっていたわけではなく、抽象的な概念について理解するのに時間がかかった。しかし、教科学習を超えて横断的に総合する学際的、教科際的な学習を実現するためには、各教師が各教科で重視されている「大きな概念」について理解しておくことが不可欠である。なぜなら「コンセプト」を明らかにすることは、教科間でどんな学際的、教科際的な学習を実践することができるかを教師自身が知る手助けを提供するからである。ディスカッションでは、自分の教える教科以外の教科のマップを閲覧しながら、「Cross curricular theme は、何か?」ということを中心に意見を述べ合った。また、教科を超えて生徒に学ばせたい各教科に共通する「コンセプト」は何か、についても検討。意外にも、異なる教科であるにも関わらず、「Self and Friendship」「Change」「Discovery」「Environment」といった似たような概念を教授していることが明らかになった。出来上がったマップを会議室に大きく並べて全員で見えて歩き、オーバーラップする部分やギャップがあると思われる部分に、赤線や意見を書き入れていくというアクティビティーも行った。書き入れられた意見は、各教科に持ち帰って、教科ごとに改善策が話し合われた。

「コンセプト」「コンテンツ」「スキル」に「エリア・オブ・インタラクション」

を追加

第三回 教員研修会

MYPの「学習スキル(ATL)」「環境」「社会奉仕」「健康と社会教育」「創造的人間の営み(Man the Maker, or Homo Faber)」に「テクノロジー」を付け加えた6つのエリアにおいて、どのような教科間のインタラクションが可能か、どのように教科間の協力体制を築いていくか、討議。マップに、それらを書き入れる作業を行った。(7)

「コンセプト」「コンテンツ」「スキル」「エリア・オブ・インタラクション」に「SLR's(学習の成果)」の項目を追加

第四回 教員研修会

どのようにして、生徒が「学習の成果」を達成できるようなカリキュラムにしていくか、教科ごとに討議し、カリキュラムマップに書き込んでいった。

カリキュラム・マップに「評価」の項目を追加

来年度の教員研修会で予定

生徒の具体的な作品の収集と分析。学習の成果としてのSLR'sが実際にそこに認められるか討議。

MYP/PYPにおける評価のあり方は、どのようにあるべきか、また生徒の作品や学習活動にSLR'sが実際どのように反映しているかといったことが話し合われる予定である。

MYP申請文書としてIBOへ提出(予定)

## 6. SIP委員会の活動による成果

SIP委員会による上記のような活動によって、主に3つの成果が得られたように思われる。一つは、カリキュラム・マップを土台に様々なレベルでお互いのカリキュラムや教授活動についてのディスカッションを重ねたことで、教師間、教科間、学年間さらに教師と管理職の交流がいままで以上に活発に行われたことである。OISはインターナショナルスクールとしては比較的小規模であり、普段から教員間の交流は日常レベルで活発に行われているが、生徒数や教員数が多いマンモス校では各教科や学年が違えば教師間の交流も少なくなりがちなようだ。そのような教育環境において、カリキュラム・マップのような共通の枠組みで教師間の議論を促すことは、教師間の心理的なつながりを強化し

学校としてのアイデンティティーを確立する上でも有効な手段だと思われる。

また、学内のコンピューターLAN によって、カリキュラム・マップを一箇所に保管・一元化し、カリキュラム情報が異なる教科・学年の教師間で簡単に共有化できるようになったことも一つの成果である。学内 LAN にアクセスすることで、いつでもすぐにアップデートされた他教科のカリキュラム情報を得ることが出来るようになったことで、他教科の教授活動を意識しながら、日々の教授案を作成することができるようになった。例えば、筆者の担当する上級日本語のクラスを例にして言えば、クラスの読み物を選定する場合、他の教科で何を学習しているかコンピューター上のカリキュラムマップであらかじめ確認し、「社会」や「科学」で生徒が学習している内容や「英語」のクラスの読み物のジャンルにあわせて、教材を選んだりすることが可能になったのである。他の教科や学年で何を学習しているかを意識することは、自らの教授行動や教授内容をも意識し明確化するうえで大きな役割を果たすものと思われる。実は、SIP 委員会の中で、カリキュラムマップをデータベース化し、キーワードを入力すれば、その言葉に関連する事柄を教えているコースのカリキュラム・マップが全学年、全教科で即座に表示されるようなシステムを構築してはどうか、という意見がコンピューターの教師から出された。時間的かつ資金的な余裕がなく断念せざるをえなかったが、将来の検討課題としては面白いアイデアであると私には思われた。この点については、今後の課題である。

最後に、これも教授活動の意識化・明確化と関連するが、カリキュラム・マップ作成のためのディスカッションを繰り返す中で、私達は各教科で教える具体的な「コンテンツ」以上に、生徒に習得させたい「コンセプト」と「スキル」について教師側が明確に認識しておくことの大切さに気付いたように思われる。生徒にしる大人にしる、「意味」がないことを学ぼうとするのは苦痛である。たとえば、フランス革命がどこで何年に起こったかといった事柄（「コンテンツ」）も大切ではあるが、それよりも大切なことは、フランス革命が大きな歴史上の社会的「変化」であるという「コンセプト」についての認識が十分に出来ていることである。なぜなら、そのような「コンセプト」に対する認識がしっかり出来ているならば、生徒は「変化」というキーワードをもとにして、たとえばロシア革命などの時代や地理的空間を超えた他の社会変化との違いにも目を向けるに違いないからである。また、なぜフランス革命が起こったかということを引きちんと理解するスキル（例えば「推論能力」）が生徒に養われているならば、なぜロシアに革命が起こったかということについても引きちんと推論・分析できるはずである。はっきりした「コンセプト」の基に「コンテンツ」を習得し、他の分野にも応用できる「スキル」を身に付けるのでなければ、MYP のガイドで述べられているように、知識は断片化しお互いに関連性のないものになってしまうだろう。（8）さらに、「知識」は、「期待される学習の成果（SLR）」に結びついてこそ、はじめて有用なものになりえる。近年、有名大学を卒業しているにもかかわらずいとも簡単に人を殺害してしまうような凶悪な事件が新聞などでよく報じられる。知識の習得そのものが目的化してしまい、人格的形成を怠ったために起こった悲劇である。このような結果を防ぐためにも、生徒に期待される学習の成果と人格形成が、カリキュラムの中で具体的にどう実現されているのか、常に明らかにされていく必要があるだろう。また、学習の成果に結びつく評価のあり方についても同様である。2000 2001 年度 SIP 委員会では、この点まで踏み込んで議論することができなかった。WASC に提言された「明確に文書化されたカリキュラム」を完成し、MYP/PYP の導入を実現させるためには、まだまだやらなければならないことは多い。しかし、現時点においてすでに上記のような「成果」が生まれていることは注目に値することであると思われる。ここに特筆しておきたい。

## 7. おわりに - 今後の展望 -

2000 2001 年度 SIP 委員会は、2001 年 9 月に、MYP/PYP 導入の基礎作りの役割を終え、メンバーの何人かを残して解散することになった。2001 年 9 月からは、メンバーの交代により新たな SIP 委員会の活動がはじまる。2001 年度より、MYP/PYP 導入の具体的な施行期間が始まるため、SIP 委員会のメンバーもその代表を中心にして組織される予定である。カリキュラム・マップの作成によって形作られた基礎と、教員間の共通理解をさらに発展させて、より coherent なカリキュラム改革の推進が望まれている。MYP/PYP の導入は、すでに存在する学校での教育を教員によって意識的に再組織させ国際的な枠組みを与えることで、さらなる付加価値を学校教育に付与することが出来ると筆者は認識している。どの国の教育にもフレキシブルに適應できるように、教育の中身については何も強制するものはなく、IB はただ大まかな枠組みを提供するのみである。もちろん、出来上がったものに対して審査を行い、評価し、認定を行うのが MYP の教育サービスであり、具体的な教育の中

身であるカリキュラムは学校自身が用意しなければならない。したがって、その実際的な教育の質がいかにあるかは、MYP/PYP 参加校になろうとする学校の取り組み次第であるといわざるを得ない。

本論文は、MYP/PYP 認定に向けて本校がどのような取り組みを行っているかを明らかにすることで、自らのカリキュラムを再構築する際のヒントを提供しようとするものである。現在、日本には K-12 全学年で IB のカリキュラムを採用している学校はない。これから IB の申請を目指そうとしている教育機関にとっても OIS の実践が何らかの参考になれば幸いである。

注

- (1) WASC, WASC Visiting Committee Report, April 18-21, 2000
- (2) SLR's (Student's Learning Results)は、本校の教育を通して生徒に期待される成果であり、教師、生徒、保護者から意見を募り議論を重ねて作成された。具体的には、**ACADEMICS** (Knowledgeable, Scholarly, Literate, Thoughtful, Creative), **VALUE** (Ethical, Respectful, Caring), **QUALITIES** (Adaptable, Balanced, Healthy, Courageous), の3つのカテゴリーからなり、生徒ハンドブックに明記、説明されている。(2001 年度版では、pp.4-5)
- (3) Osaka International School, School Improvement Plan Self Study for the WASC visitation, January 2000, pp68-69
- (4) School Improvement Process Committee 2001-02 の構成メンバー

SIP Leader (John Searle)  
・ Headmaster 1 名 (Julie Wagner) ・ E S の校長 1 名 (Karin Caffin)  
・ M S / H S の校長 1 名 (John Searle)  
・ 小学部の代表 2 名 (Brenda Morocco / Cynthia A. Ruptic)  
・ 中学部・高等部の代表 4 名  
    Science/Math/Technology より 1 名 (William Stocks)  
    English/Social studies/Guidane より 1 名 (Lindsay Caffin)  
    Art/Music/PE より 1 名 (Jerry Heiman / Bill Morocco)  
    Japanese Language /ESL/Modern Language より 1 名 (Kazuhisa Hara) 計 10 名

- (5) 私が担当する 10 年生の上級日本語コースのカリキュラム・マップを添付資料として次ページに掲載してみたい。尚、ここに紹介するカリキュラム・マップは 2001 年 6 月時点のものであるため、「アセスメント」などの項目は掲載されていない。
- (6) 「コンテンツ」「スキル」「コンセプト」については、フローチャートの中の説明を参照
- (7) Area of Interaction については、詳しくは本研究紀要所収の拙論「IB の教育理念と Middle Year Program その内容と特徴についての一考察」を参照されたい。
- (8) IBO, Guide to the Middle Year Program, 1998

参考文献

西村俊一 『国際的学力の探求』 創友社 1989